みんなの美術館 A Museum For All, and With All みんなと美術館

21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

金沢21世紀美術館×手話×ろう者 活動のあゆみ

「誰にとっても来館しやすい美術館とは？」

15年間の活動をふりかえる
スタッフによる舞台裏トーク収録！

21

A museum meets Japanese Sign Launguage and the deaf

みんなの美術館 みんなと美術館

金沢21世紀美術館×手話×ろう者　活動のあゆみ

A Museum For All, and With All

A museum meets Japanese Sign Launguage and the deaf

みんなの美術館

島 敦彦
（金沢21世紀美術館 館長）

金沢21世紀美術館は、2004年の開館以来、実に多くの方々に親しまれてきました。出入口が多く、全面ガラス張り、開放感に満ち溢れた建物は、とても近づきやすい。また、レアンドロ・エルリッヒの《スイミング・プール》など館内外の魅力的な作品群も、開館15年を経た今なお、来場者を楽しませています。

ところが、そんな金沢21世紀美術館でさえ、まだどこか偉そうに見えます。本記録集の題名でもある「みんなの美術館」の「みんな」とは誰のことでしょうか。あるいは多くの美術館が、「開かれた美術館」と形容されますが、はたして誰に対しても開かれているのでしょうか。たとえば、目の見えない人や耳の聞こえない人、あるいは心身に障がいのある人たちにとって、美術館は必ずしも開かれていない、ということを私たちはつい忘れがちです。

金沢21世紀美術館では、開館当初から継続している対話型鑑賞事業「ミュージアム・クルーズ」に、石川県立ろう学校の児童を毎回招待しています。子どもたちとボランティアらが当館のコレクション展を、手話通訳を介しながら一緒に見て歩くのです。こうした継続的な取り組みと並行して、近年はろう者の映画監督、牧原依里らによる完全無音の映画『LISTEN リッスン』の上映と手話によるトークを催したほか、コンドルズの近藤良平と埼玉県内の障がいのある方々によるダンスカンパニー「ハンドルズ」の金沢公演を実現させるなど、少しずつではありますが「みんなの美術館」に近づく活動を積極的に展開しています。

しかし、当館の取り組みはまだ始まったばかりです。私も2017年に金沢へ来て、美術館で開催された手話の勉強会に初めて参加し、手話はまさに言語、いわば外国語のようだと痛感しました。その後の学習が全く追いついていませんが、ほんの少しかじるだけでも世界が広がるもので、久しぶりに新鮮な感動を覚えました。

金沢21世紀美術館が、真の意味で「みんなの美術館」になるためには、こうしたささやかな試みを継続するしかありません。そしてそれがやがて大きなうねりとなって、金沢だけではなく、日本、そして世界の美術館が「みんなの美術館」になることを夢見ています。

A Museum For Everyone

SHIMA Atsuhiko
Director of the 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

The 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, has attracted and charmed a remarkable number of people since its inception in 2004. Its extensive doorways and glass walls give the building a spacious and approachable feel. The museum's array of works installed inside and outside the building, including Leandro ERLICH's *The Swimming Pool*, still fascinates visitors 15 years after its opening.

However, despite all this, the museum is still, in some aspects, considered stuck up and out of reach. "A museum for everyone." But by "everyone," who are we referring to? There are also many museums that are characterized as being "open to all," but could this possibly be true? For instance, we tend to forget that museums aren't always usable and friendly for people with visual, hearing and mobility impairments.

Every year at our museum, we invite fourth grade elementary students, including those from the Ishikawa Prefectural School for the Deaf, to participate in our "Museum Cruise." This is an interactive art appreciation program that we have been offering ever since the museum opened, in which dedicated volunteers guide the deaf children around the exhibit floor together with sign language interpreters. In parallel with such continuous projects like the Museum Cruise, we recently ran a screening of LISTEN, a silent film by deaf film director MAKIHARA Eri, which was followed by her live talk show using sign language. We also helped the Handles deliver a dance performance in Kanazawa. The Handles consist of dancers with disabilities from Saitama, and is directed by KONDO Ryohei, who leads the dance troupe Condors. These are all very small steps, but we are committed to actively engaging in projects that will gradually bring us closer to "a museum for everyone."

But our efforts have only just begun. When I came to Kanazawa in 2017, I participated in my first ever sign language lesson held at this museum. The experience hit home how signing is indeed a language and a means of communication — almost a foreign language. After that I have been falling behind in my lessons, but even a little knowledge of the language helped me expand my horizons, giving me a fresh new sensation I hadn't felt in a while.

It is critical that we continue carrying out our small efforts to truly turn this museum into "a museum for everyone." It is my dream that these small steps will eventually lead to a massive ripple effect, transforming museums not just in Kanazawa but the whole country and around the world, into "a museum for everyone."

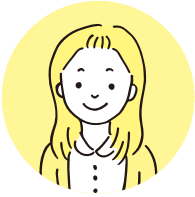
ふりかえり座談会

～ろう者との15年間の活動をふりかえる～

「誰にとっても来館しやすい、楽しい美術館はどんな場所？」

金沢21世紀美術館では、このテーマを地域の人々と共有し、ともに行動していきたいと考えています。活動の一環として、見た目ではわかりにくい身体的な特性を持ち、「手話」をコミュニケーションに用いる耳が聞こえない「ろう者」の人たちと、手話通訳者のサポートを受けながら作品鑑賞や映画上映会などを行ってきました。
この記録集では、2004年の開館から15年にわたり、ろう者とともに過ごした活動を美術館スタッフの座談会を通してふりかえります。
「わたしと美術館」から「みんなの美術館」、そして「みんなと美術館」へ。悩みながら前へ進み、関係を深めてゆく、奮闘する舞台裏の記録です。

座談会に登場する３人



吉備 久美子　KIBI Kumiko

金沢21世紀美術館のエデュケーター。ここで紹介するほぼすべての事業に携わる。美術館スタッフ対象の手話勉強会を機に金沢市の手話奉仕員養成講座（入門・基礎）を受講し、全国手話検定３級を取得。検定試験前は、手話の指文字しりとりをしながら徒歩通勤している。

森 絵里花　MORI Erika

金沢21世紀美術館のプログラム・コーディネーター。2016年以降の事業に携わる。ろう者との活動を重ねる中で、「わたしの名前は森です」と「ようこそ金沢21世紀美術館へ」の手話をなんとか習得。今後はフルネームでの自己紹介が目標。

岡田 優太　OKADA Yuta

金沢21世紀美術館のインターンシップ研修生。金沢大学大学院生。「手話を交えたおしゃべり作品鑑賞会」の運営に参加。金沢市公式YouTubeチャンネルで手話を予習し、「わたしの名前は岡田です」を初顔合わせで披露。動画での手話の勉強は、手の動きがわかりやすいのでおすすめ。

キーワード

「手　　話」…… 日本では「手話」という言い方が一般的ですが、国際社会同様、言い方が「手話言語（Sign Language）」に変わりつつあります。

「ろう者」…… 耳が聞こえない人々のうち、おもに手話言語でコミュニケーションをとって日常生活を送る人々のことです。

【金沢21世紀美術館×手話×ろう者】

活動のあゆみ

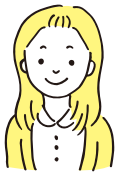
		美術館で何があった？	社会の動き
2004年度	始めてみた期	文化庁芸術拠点形成事業・金沢21世紀美術館開館記念特別プログラム **「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」** P6	2005.10 障害者自立支援法成立
2006年度	始めてみた期	金沢市内小学4年生全児童招待プログラム **「ミュージアム・クルーズ」** P7 → 招待プログラム継続	2006.12 「手話は言語である」と定義した「障害者権利条約」が国連総会において全会一致で採択
			2007.9 日本政府が障害者権利条約に署名
2016年度	やってみた期	music@rt Season 10 P10 「Merry Marubi Christmas～クリスマスのおはなし」	2011.7 改正「障害者基本法」が「言語（手話を含む）」と規定・成立
2017年度	やってみた期	music@rt Season 11 P10 「Merry Marubi Christmas～くるみ割り人形とねずみの王様」	2013.6 障害者雇用促進法、障害者差別解消法成立
		近藤良平とハンドルズによるダンス公演 P11 「初めての そんなふうな 気がしない」	2013.10 鳥取県で全国初の手話言語条例施行
		金沢21世紀美術館スタッフ勉強会 P12 「聴覚障がい者のコミュニケーションについて学ぼう」	2017.6 金沢市手話言語条例施行
2018年度	つながってみた期	**映画『LISTEN リッスン』上映会＆トークセッション** P14	2017.12 手話言語の国際デー国連総会で承認
2019年度	つながってみた期	**「手話を交えたおしゃべり作品鑑賞会」** P16 展覧会「アペルト11 久野彩子 都市のメタモルフォーゼ」とともに	2018.4 石川県手話言語条例施行
	広がってきた期	ワークショップ **「からだでつたえあう サイレントワールド」** P21	（参考）一般財団法人全日本ろうあ連盟ウェブサイト
	広がってきた期	美術館がきっともっと面白くなる10のレッスン P22 **LESSON9「手を使って『かんじて、つたえる』を発明しよう」**	
	広がってきた期	**「手話で紹介する金沢21世紀美術館」動画制作と配信** P23	
		これから P26	

A Museum For All,
and With All
ふりかえり座談会

CHAPTER 1
2004 ››› 2015

始めてみた期

ろう学校の子どもたちとの出会い
年に一度の招待活動



吉備：金沢21世紀美術館（以下、21美）は、2004年の10月9日に開館しました。その年に金沢市内の小中学生を全員美術館に招待したのが「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」（❶）。そこに石川県立ろう学校も参加してくれて、それが最初の出会いですね。ろう学校は小中高生全員で来てくれたんですが、当時の資料を見返して衝撃だったのは、手話通訳者の派遣を申請した形跡がないこと。つまり、ろう学校の先生がわたしの挨拶などを通訳してくれたんですね。ろう学校の先生だからといってみんな手話通訳ができるわけではないのですが、当時は何も知らず……。

岡田：鑑賞の際に、ろう者ならではの視点は感じましたか？

吉備：須田悦弘さんの《雑草》という木彫作品が、東口玄関の上に展示されたんですね。目に触れるけれど気づくかどうか……という場所を作家が選びました。メインエントランス付近でろう学校の子たちに挨拶をして、「実はこの近くにも、『えっ、こんなところに！？』という場所に作品があります」と言ったら、みんなすぐにパッと指差して、「あれだ！」と。一瞬で見抜いたのは、参加した95校のうち唯一で、視覚情報への鋭敏さにすごく驚きました。他にも、レアンドロ・エルリッヒの《スイミング・プール》では、プールの上と下で手話で話しているのも、初めて見た時はハッとしましたね。

岡田：「ミュージアム・クルーズ（以下、クルーズ）」（❷）になってからは、ろう学校も小学４年生のみの来館になったんですか？

吉備：小学３・４年生の複式学級で参加することが多いです。作品を見て、感想を発表するときなどは、子どもたちは相手の口の形を手がかりに何を話しているかを読み取るので、顔を見合わせていれば聞こえているように感じることがよくあります。でも、顔を見合わせていないと話し合いにくいことがわかって、作品を見ながら話すのは難しいんだなと気づきました。

森：ろう学校や特別支援学校の対応をしていると、コミュニケーションにおいてふだん無意識にやっていることを、「あっ！」と思うことが増えますよね。

❶ 文化庁芸術拠点形成事業・
金沢21世紀美術館開館記念特別プログラム
「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」

▶2004.11.2（火）～2005.3.4（金）のべ57日間　@金沢21世紀美術館

「子どもたちとともに、成長する美術館」を目指し、開館記念展へ金沢市内の全小中学生約4万人を学校単位で招待した。

2004年度 ろう学校の小中高生に手話で「またね」とお別れの挨拶

❷ 金沢市内小学4年生全児童招待プログラム
「ミュージアム・クルーズ」

▶2006年度よりコレクション展の会期にあわせて実施
@金沢21世紀美術館

地域の学校と美術館の継続的な連携活動として、小学4年生を対象にした対話型作品鑑賞プログラムを実施している。

2018年度 ろう学校小学3・4年生とともに
（コレクション展「アジアの風景」）

岡田：ろう学校のみなさんが来る際の準備はどうしていたんですか？

吉備：開館当時は他の学校と同じように、バスの手配とガイドブックの配布、待ち受け型のボランティア対応を準備しました。

岡田：徐々に対応の変化などはあったんでしょうか？

吉備：2006年にろう学校から「作品鑑賞の時は手話通訳者にいて欲しい」と要望があり、石川県聴覚障害者センター（❸）で予約することを教えてもらいました。でも、その年は手話通訳派遣委託費の予算を取っていなかったから、「どこから捻出しよう……」と思ったのを覚えています。翌年からは予算も付け、手話通訳者との事前打ち合わせを始めました。そのうち、子どもたちと作品を鑑賞するクルーズ・クルー（❹／以下、クルー）と手話通訳さんの打ち合わせが大事だとわかり、その時間を増やしました。

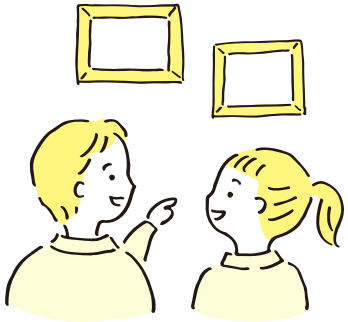
森：手話通訳さんがいても、クルーさんと子どもたちのコミュニケーションがないと通訳する内容がないんですよね。クルーさんの中には「おとなしいかと思っていたら、思っていたよりやんちゃだった」という意見もあり、耳の聞こえない子どもに対するイメージとのギャップで、どう接していいかわからない場合もあったのかなと。

岡田：小学４年生なので注意散漫になるところは、経験のあるクルーさんの力量でうまく関心を引いたり、それとなく子どもたちの意見を聞いたり。クルーさんそれぞれの得手不得手を共有し、補い合いながらうまく接している印象です。

吉備：そう言われてみると、ふだんのクルーズとなんら変わりはないよね。

森：そうですね。実際はいつものクルーズとおなじ。つまり、なにかバリアみたいなものがこちら側にあるのかな。

吉備：思い込みとかね。「補聴器は水に弱いから雨の日は外に出ない」以外はいつもどおりで、身構えなくてもいいし、信頼関係という意味ではいっしょだよね。



ふりかえってみての反省

森：そういえば、2006年の実現しなかった企画というのは？

吉備：あぁ……「手話通訳付きギャラリートーク」（❺）を企画したけど、1人も参加者がいなかったという件ですね。今ならろう者への情報発信の仕方もわかるんですが、当時は告知もうまくできず。その反省を踏まえて2度目を企画するなどのアクションも起こさなかった。「年に1回ろう学校の人たちに来てもらってます。手話通訳も付けてます」と、「やってる」「できてる」って思っていたかも。2007年から2015年ぐらいは担当としての「ジコマン（自己満足）期」かなぁ。

岡田：今だからこそ、そう思えるってことですよね。

吉備：そうだね。ふりかえってみると。ただ、聞こえ具合を問わず、「前にクルーズで来て」と言ってくださる方も多い。この美術館が知らない場所ではなくて、「来たことのある場所」として関係性を作れるのはありがたいですね。

森：2004年に来た中学生はもう30歳ですもんね。

❸ 石川県聴覚障害者センター

社会福祉法人石川県聴覚障害者協会が運営。情報提供支援、コミュニケーション支援、聴覚障害者の積極的な社会参加等を支援している。 http://www.deaf-ishikawa.or.jp

❹ 作品鑑賞プログラム・メンバー 「クルーズ・クルー」

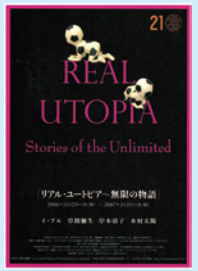
クルーズで来館する子どもたちと作品を鑑賞し、美術館体験をサポートする。活動名称に込められた「旅の仲間」として、子ども同士の対話を促し、安全を見守る役割を担う。

クルーと手話通訳者で会場下見
（2019年度「現在地：未来の地図を描くために[2]」展）

2019年度 クルーズ・クルー解散式（2020年2月）

❺ 手話通訳付き ギャラリー・トーク

「リアル・ユートピア～無限の物語」展（2006.11.23-2007.3.21）の「学芸員によるギャラリー・トーク（全6回）」において一度企画。本展では65歳以上を対象に「ミュージアムで団欒～Listen to My Story」なども実施。



A Museum For All, and With All
ふりかえり座談会

CHAPTER 2
2016 ››› 2018

やってみた期
つながりを生かす〜手話にめざめる

岡田：僕は2019年に初めてろう学校の生徒さんと会いました。それまでは「言語としての手話」というイメージが強かったんですが、実際に手話でコミュニケーションしているのを見て、手の動かし方の強弱だとか、そこに口の動かし方を加えたりだとか、記号的で言語的な手話じゃない、「表現としての手話」を肌身で感じました。

吉備：2016年の「music@rt」（❻）では、クリスマスにちなんだ音楽を演奏し、絵本の朗読に手話をつけました。21美でパフォーミングアーツを担当する黒田裕子さんが、その場の空気の振動など、聞こえない人はわたしたちにはわからない音楽の楽しみ方を知っているのではないかと、それこそ「表現としての手話」という角度から企画したんですね。手話通訳は金沢市聴力障害者福祉協会（❼）に申し込んでいました。

photo: IKEDA Hiraku

❻ music@rt Season 10
「Merry Marubi Christmas〜クリスマスのおはなし」
▶2016.12.23（金・祝） @金沢21世紀美術館 情報ラウンジ

music@rt Season 11
「Merry Marubi Christmas〜くるみ割り人形とねずみの王様」
▶2017.12.23（土・祝） @金沢21世紀美術館 情報ラウンジ

オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）との連携企画
〈写真〉「Merry Marubi Christmas〜クリスマスのおはなし」朗読風景

森：この時に、手話通訳を介して参加している人かどうかは見てもわからないんだ、とハッとしました。見えない障がいって実はいっぱいあって、いろんな生きづらさがあるんだろうなあと思いましたね。

・・・・

吉備：さて、2018年のハンドルズ（❽）ですが、これは埼玉県の彩の国さいたま芸術劇場で始まった、コンドルズの近藤良平さんと障がい者の方々とのダンスカンパニーで、黒田さんがオファーした公演でした。地域で障がいのある方に、公演を見るだけでなく表現する楽しさを味わってもらいたいと思い、近藤良平さんによるダンスワークショップを事前に2回開催しました。

森：そうでしたね。アート活動などに積極的な地域の支援センターや、障がいのある方との「だんす教室」を開催している地元のダンスアーティスト、なかむらくるみさんに声をかけた結果、理解を得て来てもらえた。最終的には、なかむらさんとワークショップ参加者のほとんどが「金沢の仲間たち」としてゲスト出演を果たしました。

吉備：いい公演をただやってもなかなか人は来てくれない。地元の人が関わることで興味を持って来てくれる人が増えるという実感があります。

❼ 金沢市聴力障害者福祉協会

金沢市内の聴覚障害者の生活と権利を守り、社会参加の機会を拡大し、聞こえない・聞こえにくい仲間同士の親睦を図るための様々な事業を行っている。
https://www.normanet.ne.jp/~kmimi/

❽ 近藤良平とハンドルズによるダンス公演
「初めての そんなふうな 気がしない」〈写真右〉
▶2018.3.11（日） @金沢市民芸術村 パフォーミングスクエア

photo: IKEDA Hiraku

森：この公演は、武井誠さんという手話通訳士がパフォーマンスもするというユニークなものでした。公演のチラシには「車いすの方、手話通訳を利用される方、ほか鑑賞時に配慮ご希望の方はあらかじめお申し出ください」と明記し、会場案内の手話通訳者も別に手配しました。事前にろう者が３名来るとわかった状態で手話通訳さんと受付に立ちましたが、**広い会場でどこから人が来るかわからない。さらに、該当する人がどの人かわからない状態で、適切な情報を案内するのが難しく**て……。結局その３名が向こうから「手話／通訳さん／いる／？」と手話と口の動きで伝えてくださって、「あっ、いますいます！」とつなげました。

吉備：**どの辺に座ると舞台の手話が見えやすいか**という案内もしていましたよね。

森：この公演は自由席だったので、事前に武井さんへ手話が見えやすいエリアを相談し、席を大まかに確保しておいて、その中から選んでもらいました。海外の事例で、「車椅子だと席は選べないの？」という声もあると聞いていたので。どこまでの合理的配慮ができるか、難しいところではありますが。しかしまあ、**やってみないとわからない**、ということが本当に多かったですね。

吉備：**現場での経験を共有して、続けていく**というのも大事ですよね。「引き継ぎTO DO」を作れば、次の機会に更新しやすくなるのかな。美術館の中だけじゃなくって、外の人ともいっしょに何かできると、さらに経験が広まったり別のアイデアも聞けるから、それも大事。知ってるケースが増えていくと想定外は減っていくから。

森：「これぐらいはあるよね」と思えたりね。

吉備：運営側はもちろん観客側も、想定外のことが起こった時に、当事者への配慮であれクレームであれ、直接行動できたらいいですよね。**知っているということがその場での反応につながっていったらいいな**と思います。知ると、わかんないことをわかんないって言えるな、っていうのが最近の実感で。例えば手話でも「超速くてわかんないからもう一回！」って言えるし、そうしたら別の単語で言い換えてくれたり。**外国語と同じだなと。**

森：ほんとに外国語といっしょだと思いますね。人対人のコミュニケーションという意味では、身振り手振りや表情で相手が汲んでくれて、「あっ、伝わった！」と勝手にうれしくなったりするんだけど、その一方で、きっと自分は相手が伝えたいことを全然わかってないことがあるんだろうな、と。まさに言語。

吉備：2018年にやったスタッフ対象の**手話の勉強会**（❾）にも出たんだっけ？

森：出ましたよー。

吉備：あの時は上司から「年度末になにか勉強会できない？ たとえば手話とか」と言われて、調べていくと、**手話言語条例**（❿）が全国の自治体で成立していっていることを知りました。わたし自身も勉強会をきっかけに手話の講座に通い始めて、今も続けてます。

森：勉強会で終わりにしないで続けているんですね。

吉備：ろう学校のクルーズで**直接子どもたちと手話で会話したい**というのが原動力ですね。「なるほど」「どうしてそう思ったの？」ぐらいの相槌は打ちたいなと。

❾ 金沢21世紀美術館スタッフ勉強会
「聴覚障がい者のコミュニケーションについて学ぼう」

▶2018.3.22（木）・23日（金）
@金沢21世紀美術館 会議室1

金沢市聴力障害者福祉協会から講師を招き、ろう者の生活や「金沢21世紀美術館」「タレルの部屋」といった地域のオリジナル手話を学んだ。

＜勉強会に参加して＞
○寝言ならぬ寝手話があることにびっくり！
○美術館で手話案内できるといいなと思いました。
○筆談が苦手な方もおられるのは知りませんでした。気をつけたいです。
○「もうFAXなんていらないよね」と家族で話していたのを反省しました。
○電話でしか対応してもらえない場面が多いこともよくわかりました。
○方言や作品名の手話がおもしろかった。
○非常時は視覚的な情報が少なくなりそうだと、今までの消防訓練を思い出して心配になりました。

❿ **手話言語条例**

「手話が言語であるとの認識に基づき、県・市町・県民・事業者が一体となって手話を使用しやすい環境を整備し、障害のある人もない人も相互に人格と個性を尊重し合いながら共生することのできる地域社会を築くため、『石川県手話言語条例』を制定しました。」
（参考）石川県ウェブサイト

A Museum For All, and With All
ふりかえり座談会

CHAPTER 3
2018 ››› 2019

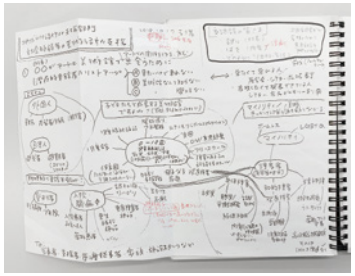
つながってみた期

とにかくいっしょにやってみる

吉備：2018年度の初めに「多くの市民により多様性が尊重され、芸術文化を通じた社会参加がなされる美術館」を目指して、美術館に来たいけど来られない「潜在的来館者層」を調べて、ネットワークづくりに取り組むというミッションを与えられました。その時に思い出したのが、英国留学中にインターンシップでお世話になったテート・リバプール（国立の近現代美術館）。そこでは、美術館の教育普及担当が外部の人たちと企画を練って、現場をその人たちに任せようとしていたのが印象深かったです。例えばDVの加害者と被害者に向けた別々のプログラム、刑務所の受刑者を対象とするアウトリーチプログラムなどを地元のアーティストと計画していて、対象や内容の幅広さに驚きました。

岡田：それはすごいですね。僕も見てみたいなぁ。

吉備：21美ではどこから始めたらいいかわからず、どんな人たちが美術館でアートとの関係性を育めたらよいか、書き出してみました。同じ頃、通っている手話講座で、ろう者にとって字幕付きの映画は身近な娯楽で、洋画好きが多いことを知りました。まずは当事者目線で映画を見る機会を作りたいと思い始めたところ牧原依里さんと知り合い、映画『LISTEN リッスン』上映会＆トークセッション（⑪）につながりました。



吉備ノート

森：どこにアプローチするか、いろんな方向性がある中、吉備さんの経験の積み重ねがあって、ろう者との活動になっていったという感じですよね。

吉備：この企画は、手話サークルなど、ろう者と接点のある10団体の有志21名といっしょに準備し、トークの司会をろう学校の高校生たちが担当しました。

森：チラシの中面に「参加の流れ」がかなり細かく書いてあったのが印象的でした。申込時や当日にどんなことがあるか、ここまで書けば、きっといろんな人にとってわかりやすいんだろうなと。

吉備：打ち合わせしながら、同じ情報を運営側もお客さんもわかるようにしておけば、受付がスムーズだねといったアイデアが出てきた気がします。

森：もうひとつ、表紙に「誰にとっても来館しやすい、楽しい美術館はどんな場所？」いうメッセージを入れてありましたよね。たしか最初は入ってなかった？

吉備：上映会に来てみたら実はそういうテーマだったんだ、とさりげなく伝わるのがいいなぁと思って、途中で表紙からメッセージを取りました。すぐに上司から「今回はこのテーマ

⑪ 映画『LISTEN リッスン』上映会＆トークセッション

▶2019.1.27（日） @金沢21世紀美術館 シアター21

ろう者の監督による「音楽」とは何かを問う無音映画の上映と、牧原依里監督によるトークを実施した。手話通訳と音声同時テキスト機能付き。

〈写真左〉手話スタッフの腕章をつけた案内係
〈写真右〉開演前、スクリーン表示とアナウンスで呼びかけ

〈運営メンバー〉
（10団体の有志21名）
金沢市聴力障害者福祉協会、金沢手話サークル あての会、
手話サークル 手の会、金沢要約筆記サークル、
難聴者・中途失聴者サークル 和の会、
石川県立ろう学校高等部・専攻科、未来link、
まるびぃ みらいカフェ、
まるびぃ シネマ・パラダイス！実行委員会、
金沢21世紀美術館インターンシップ研修生

「リッスン」の手話とともに記念撮影

を発信する場なんじゃないの？」と指摘されて戻したという……（笑）。結果的に入れてよかったです。

森：宣言文を前に出せば、会場に来ない人にもメッセージが伝わるのかなと思ったので、印象に残ってますね。

吉備：手話を習っていると協会の方とも会う機会が増え、「21美」ではなく「吉備」という人として認識してもらえるようになり、相談しやすくなりました。「スカイプなら手話の問い合わせを受けられますよ」と言ってやってくれたのもうれしかったですね。運営メンバーから「いろんなものがおしゃれ！」と言われたのも印象的でした。チラシの色に合わせて作った腕章や案内ボードを「欲しい！」って。気分の上がるちょっとしたアイテムは大事。

森：デザインは大事ですよね。

吉備：あと、本番ももちろん大切なんだけど、事前に会って打ち合わせして、「これってどうしたらいいんだろうね？」と、とにかくいっしょに話し合うこと。ガラス張りの会議室から手話が見えて、通りかかった警備さんから「何か始まるんですか？」と後で声をかけられたこともありました。今までと何か違うぞ、と伝わったんでしょうね。活動後に中途失聴の運営メンバーがメールをくれて、「ふだんはサポートしてもらう側ばかりだけど、自分がお客さんを迎える側になれたことがすごくうれしかった。主催者に理解がないとこういう場はないから、ほんとうにありがとう」と。この言葉のご褒美をずっと忘れずにいたいです。

ろう学校の中高生が企画・運営する！

吉備：2019年に文化庁の委託事業「障害者による文化芸術活動推進事業」へ申し込む際に、ろう学校の生徒といっしょに何かするというのはイメージしていました。9月23日の手話言語の国際デーに何かしませんかと先生に相談したら、放課後や夏休みの部活動の時間を使って、思春期まっさかりの中２・高２・高３の文化部３名が参加してくれました。「おしゃべり作品鑑賞会」（⑫）は準備と本番の合わせて５日間の活動となりました。

岡田：僕は当時インターンシップ研修生として美術館で教育普及事業に関わっていました。初日は金沢市の公式YouTube「手話で話そう」を見て、「わたしの名前は岡田です」だけ覚えていき、不安まじりで顔を合わせたんですけど、三者三様の個性があって、声の大きさも聞こえ方もみんな違うし、直接会うことで認識の幅が広がったと思います。配慮する部分はあるかもしれないけれど、全然ふつうの接し方でいいんだなと思いました。２回目以降は、じゃあどうやったら生徒それぞれのやりたいことを引き出してあげられるか、と自分のスタンスを変えていきました。

森：今回は、彼女たちが企画し準備するという構造だったから、その辺りのさじ加減は、ミーティングしながら考えていった部分ではありますよね。

岡田：生徒たちも初日からノリノリというわけではなかったですよね（笑）。変わったのが２回目で、実際に作品を肌身で感じた後に「みる・つくーる」で小学生といっしょに手を

⑫「手話を交えたおしゃべり作品鑑賞会」 展覧会「アペルト11 久野彩子 都市のメタモルフォーゼ」とともに

【第1回】美術館を見て回る ▶2019.7.5（金）

@金沢21世紀美術館 交流ゾーン

館内を見て回り、展示準備中のアーティストへ挨拶し、作品について話を聞いた。

【第2回】「スタジオ みる・つくーる」参加 ▶2019.8.8（木）

@金沢21世紀美術館 長期インスタレーションルーム、キッズスタジオ

小学校団体向け作品鑑賞＆造形プログラムへ参加し、展覧会にちなんだ作品づくりを体験した。

【第3回】プログラム準備 ▶2019.8.29（木）

@金沢21世紀美術館 会議室1、長期インスタレーションルーム

活動の流れや役割分担、照明の暗い展示室で手話が見えるかなどを話し合った。

【第4回】リハーサル ▶2019.9.19（木）

@金沢21世紀美術館 会議室1、長期インスタレーションルーム

クルーの有志と本番同様に過ごした後、意見交換会で受けた助言を元に構成を見直した。

久野彩子《metropolis》2015

動かす中で、自分なりのやり方を見つけていき、「自分が感じたことを誰かに伝えたい」という思いにつながったんじゃないかな。まずは「作品を見た時にどう感じたか」という自分の気持ちを知ることから、徐々に「おしゃべり作品鑑賞会」の土台が作られていきました。2回目の終わりに吉備さんから、「じゃあ、みんなができること・できないことを言って、そこからどうやって進めるか決めていこう」と提案があり、それぞれ何ができるのかを探しました。僕は全体の流れを意識したり、どうすれば「おしゃべり」を共有できるか、一歩離れた目で見てアドバイスしたりしました。

吉備：岡田君は3回目に来られなかったので、森さんに進行をお願いしましたよね。

森：まずは「みんなはどう見た？」「どんな時間を作りたい？」っていう彼女たちの気持ちを大事にしました。自分ごとにならないとやらされ感があるじゃないですか。でも、スタッフだけじゃなくて、作家さんや小学生、リハーサルのお客さんとして来てくれたクルーさんなど、いろんな人と会う中で、挑戦してみよう、がんばってみようという気持ちが出てきたのかな。

吉備：リハーサルで「あなたたちの意見も聞きたいわ」「あなたどう思った？」などなど、いろんな意見や質問をシャワーのように浴びて、げっそりしてましたね（笑）。

森：「司会だけすればいいと思ってたけど違うのかー」みたいな（笑）。

岡田：つい横から口を挟みたくなることもあったんですけど、3人がなんとか自分たちでやろうとしていたのでぐっと堪えて見守りました。結果的には、まさに「おしゃべり作品鑑賞会」そのものになったなと感じましたね。

吉備：司会進行が彼女たちだから参加したという人が3分の2ぐらいいました。

森：お客さんもあたたかかったよね。

【第5回】本番当日

▶2019.9.23（月・祝）

@金沢21世紀美術館 会議室1、長期インスタレーションルーム

感想を述べ合うための簡単な手話を紹介した後（写真左）、久野彩子展の会場で作品を鑑賞し、感想発表を行った（写真右）。

AFTER THE PROGRAM

「手話を交えたおしゃべり作品鑑賞会」

やってみて

石川県立ろう学校文化部の皆さん

手話を勉強中の参加者もいて、お話できる人が何人もいて安心した。

知らない人や年上の人が参加してくれた。次は後輩も体験したらよいと思う。

大変だったけど、いろいろ自分で決めて進めていったのが楽しかった。

参加してみて

手話を使って表現することで、より豊かに表現できると感じた。

もっと手話を勉強しようと思いました。

いろんな人と、見る楽しみを共有できてよかった。

もっとろう者で集まりたいと思った。県外のろう者とも交流したいです。

普段ろうの人と接する機会がないのでよかった。3人の雰囲気がやわらかくあたたかく、ほっとした。

その後の様子

美術館の方々との打ち合わせを重ね、自ら展覧会の案内をする側に立ったことは、生徒達にとって大きな財産になりました。それまでじっくりと作品を鑑賞する様子が見られなかった生徒も、作品を観て感じたことを繰り返し言葉にして表出する経験を通して、鑑賞のしかたというものが分かってきたように感じました。そして普段の少人数の学級での鑑賞活動と違い、様々な年齢の沢山の方々の作品の解釈に触れることができ、生徒達の視野が広がったのではないかと思います。

さらに活動後、生徒達には自信がついてきました。当日の様子を校内に掲示したり、校内テレビで流したり、具体的に伝えると、先生や生徒から激励や労いの声かけがあり、それが彼女達の自信につながりました。特に活動の中で下級生達をサポートしていた高3の女子生徒は、今まで力はあるものの、他生の影に隠れ存在感が薄かったのですが、活動後はリーダーシップを発揮する場面が増えました。当日参加した本校生徒も、作品や手話について一般の方々に生き生きと語っており、日常の学校生活では得られない貴重な体験となりました。

作品を介して、一般来場者の方々と自然に手話について話したり、教えたりできたことは、一般来場者と作品をつなぐだけではなく、生徒達にとって美術館が身近なものになると共に、美術館を訪れる多くの方々に聴覚障害について知ってもらう良い機会となりました。

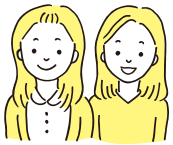
長部直子（石川県立ろう学校教諭・文化部顧問）

文化祭での活動報告（2019年10月）

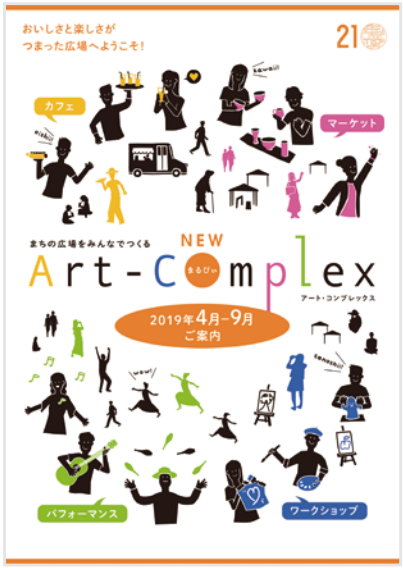
A Museum For All, and With All
ふりかえり座談会

CHAPTER 4
2019 ››› 2020

広がってきた期
プラットホームとしての美術館



森：2019年にリニューアルした「Art-Complex」(⑬)には、21美の展覧会やプロジェクトに関わったいろいろな人たちが自主企画を持って集まりました。例えば前年にハンドルズの舞台へ出演したメンバーはダンスカンパニー「あら・おるズ」を結成して、登録しました。



吉備：この美術館を身近に感じて、ここで何か表現したい、いろんな人とつながりたい、出会いたいと、前向きな気持ちで戻って来てくれたとしたら、うれしいですね。

岡田：アイメイト(盲導犬)(⑭)使用者と美術館を散歩するプログラムの主催者は、僕も参加していた「まるびぃ みらいカフェ」というボランティア活動の卒業生たちですね。

吉備：『LISTEN』上映会でごいっしょした金沢市聴力障害者協会による「サイレントワールド」(⑮)もありました。協会の方が「豊かな表現力を持つろう者の魅力を、手話を教える以外のやり方で伝えられる機会がやっと来た！」とおっしゃっていたのが印象に残っています。

森：金沢市民は展覧会が無料で見られる「市民美術の日」に開催したこともあって、子どもから大人まで大勢参加していましたよね。美術館でたまたま参加したワークショップでちょっと手話も習っちゃった、みたいな気軽な雰囲気がありました。

吉備：知らず知らずに自然とね。観光客も地元の人もいる。いろんなヒト・モノ・コトがあるハコだからこそと言えるかな。

森：異種格闘技というか(笑)。美術館の役割って、プログラムを作るだけじゃなくて、関係性やプラットホームを築くことでもある。それがこうやって発展していくんだなと、目に見える形になりましたね。

吉備：開館から15年経って、いろいろ広がってきたね。

⑬「まるびぃ Art-Complex」

「まちの広場をみんなでつくる」週末プログラム。カフェ・マーケット・パフォーマンス・ワークショップの4部門公募企画で、71団体が参加。
※「まるびぃ」とは「まるいびじゅつかん」である金沢21世紀美術館の愛称

⑭ アイメイト(盲導犬)使用者とおしゃべりしながらアート鑑賞
言葉でつたえあう美術館さんぽ〈写真右〉

▶2020.2.8(土)　@金沢21世紀美術館 交流ゾーン
○主催：NPO未来link　○協力：NPO法人アイメイトクラブ石川
○共催：金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]

⑮ ワークショップ
「からだでつたえあう サイレントワールド」

▶2019.11.3(日・祝)　@金沢21世紀美術館 会議室1

聞こえる人も聞こえない人も言葉に頼らず、音のない世界で「伝える」「伝わる」ことを体験した。

金沢市手話理解促進研修・啓発事業
○主催：金沢市聴力障害者福祉協会
○共催：金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]

森：それまでの活動や関係性があって、互いに顔が見えていて、21美はこういうこともウェルカムなんだということがわかるからこそ、企画を持ちかけてもらえるんだろうなと。

岡田：積み重ねがあってこそですよね。

森：それから、「美術館がきっともっと面白くなる10のレッスン」（⑯）という市民講座では、手話を主な言語とし、視覚身体言語を研究・表現するsigned（サインド）というチームに来てもらいました。手や身体の動きを使って鑑賞を深められないかと思って。日程は、クルーさんもわたしたちスタッフもコミュニケーションのひとつの方法として学べるように、ろう学校のクルーズの前の週に設定しました。

岡田：大学生の時に関わっていた「奥能登国際芸術祭」でも、能動的に関わってくださる方ばかりではないので、まずは裾野を広げるというか、関わるきっかけを作る。例えば作家さんと触れ合うとかでもいいんですけど、何が起こっているかを伝えて、そこからつなげていく。その人がその活動の中で自分の役割を見出せば、作品に自分の力量が入っていると感じたり、それが作品への思いやりや誇り、さらには地域への誇りにもつながる。その第一歩として、より多様な人たちに向けて発信する。それは、美術館の裾野を広げていく視点に近いのかなと感じますね。知るきっかけを作るのは大事ですね。

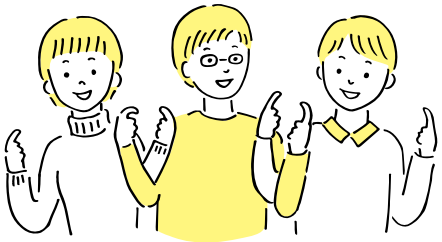
ろう者と手話で動画を作ってみる「わたしの美術館」から「みんなの美術館」へ

吉備：「手話で紹介する金沢21世紀美術館」（⑰）の動画制作は、作っておしまいではなく活用することを意識しています。2020年8月に、21美のそばの歌劇座で1000人以上が集まる全国手話通訳問題研究集会があるので、動画作りを通して、まずは地元のろう者に21美を身近に感じてもらって、集まる人たちにも事前に動画を見てもらったり、当日は集会の隙間時間に来てもらったり、PRしてもらえたらいいなと。年末の忘年会におじゃまして資料を配ったら、青年部19名のうち10名が興味あると言って集まってくれました。

森：半数以上ですね。

吉備：以前、クルーズで事前学習用の21美紹介DVDを作ってもらったオフィスブランカの経田泰夫さんに相談し、21美の広場でパフォーマンス経験のあるダンサーの山田洋平さんにも協力してもらうことになりました。

森：20代から30代の働いている人が多いから、仕事終わりに集まって「夜の美術館」の魅力を発見して伝える内容になりました。夜は空いているから自由度が高くて、みんなのびのびと過ごせたんじゃないかな。こちらから提案した企画だけど受け身ではなく、自分が楽しむぞ！という前向きな人たちが多かったですよね。



⑯ 美術館がきっともっと面白くなる10のレッスン LESSON9
「手を使って『かんじて、つたえる』を発明しよう」

▶2019.11.15（金）・16（土） @金沢21世紀美術館 シアター21

美術館や鑑賞、コミュニケーションについて学ぶ市民講座の一環として、言葉ではない方法で作品の魅力を受け取り、表すワークショップを実施した。

○講師：signed［南雲麻衣／和田夏実／児玉英之］

⑰ **「手話で紹介する金沢21世紀美術館」動画制作と配信** @金沢21世紀美術館 会議室1、交流ゾーン

【第1回】
美術館を見て回る
▶2020.1.28（火）

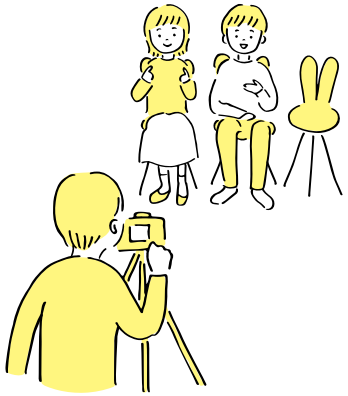
参加動機などの自己紹介後、休館中の美術館を散策し、どんな動画を作りたいか、アイデアを出し合った。

【第2回】
見る・見つける・発信する
▶2020.2.4（火）

「自分で見つける面白さ」をテーマに館内を見て回り、「夜の美術館の魅力を、表情や仕草、身体表現で伝える」動画の方向性を決めた。

吉備： みんな表現力豊かだから、いい意味で周りがどんどん巻き込まれる。それゆえか、撮影や制作に協力してくれた人たちが「ろう者の目線や世界観を尊重した動画づくり」へ理解と関心を寄せてくれました。どんな動画にしたいか話し合う中で、メンバーが「もし音楽をつけるなら（聴者へ）おまかせかなぁ」とつぶやくと、「音楽はつけず、編集でリズミカルにしよう」とか「文字情報はなるべく説明的にしないで、彼らの醸し出す雰囲気や表情を見て欲しいよね」と言ってくれて、心強かったですね。

森： 何度も来てもらうことで、みんながどんどん21美を自分たちの場所として認識していく感じもよかったですよね。もともとの彼らの雰囲気のよさに加えて、ダンサーと過ごすことで視野が広がり、深い発見に変わっていく感じがありました。「みんなと美術館」になる手前に「わたしの美術館」の段階が必要なのかもと気づきました。



「手話で紹介する金沢21世紀美術館」
動画配信はこちらから

https://youtu.be/nuQJcRRQQBI

⑰「手話で紹介する金沢21世紀美術館」動画制作と配信

@金沢21世紀美術館 会議室1、交流ゾーン

【第3回】撮影①
▶2020.2.19（水）

言葉をつなぐ「こんばんは」、ガラスの壁に映り込む姿、椅子に座っておしゃべりするシーンなどを撮影した。

【第4回】撮影②
▶2020.2.20（木）

メンバーが交代で監督を務め、お気に入りの場所で伝えたいメッセージを手話で表現するシーンを撮影した。

AFTER THE PROGRAM

「手話で紹介する金沢21世紀美術館」動画制作と配信

参加した理由は？

青年部として大きい企画にチャレンジしたい。（清水）

動画を見るのが好きだから、作ってみたいと思った。8月の全国大会に向けて、美術館の魅力、感動を伝えたい。（土倉）

美術館へ行くことを面白いと思ったことがないので、今回の経験で変化したらいいと思う。（森光）

美術館と手話で何をするのか興味があって参加した。（キノ）

去年、友達と美術館へ来た。新しいことに挑戦したくて参加した。（サダヨリ）

プロと一緒に動画を作れること、ろう者が一般の人と一緒に美術館のPRをすることに興味を持った。県外のろう者へ美術館を紹介したい。（みね）

参加してみて

新しい挑戦をして、色々の手話や楽しさがあふれて撮影できた事が成功したらいいなと思いました。また、その企画をしたいと思っています。（サダヨリ）

ろう者だけではなく、スタッフの皆さんも笑顔のあふれた撮影でした。夜の美術館はドキドキワクワクいっぱいでした。（土倉）

撮影1日目は「個」、撮影2日目は「全」って感じでした。（キノ）

「モデル」になった気分でした〜。（背戸）

緊張したけれど、メンバー・スタッフさんのおかげで楽しく過ごせた（西）

一緒に活動して

皆さんの秘めているエネルギーに驚きと感動を覚えた出会いでした。もっとこうしたい！もっと伝えたい！表現したいことがある！という気持ちが言葉ではなく伝わりました。沢山の学びと発見をありがとう！またやりましょう！

山田洋平（ダンサー／ワークショップ講師）

２日間の撮影では、場所や言葉に合わせて、みなさんに演出してもらいました。それぞれに考えてもらって、一緒に作っていけたのが良かったです。特に「こんばんは」のシーンは動きが美しく、相談しながら、変化していく様子も見せていきたいと編集しました。それらの映像は自然に６分にまとまっていきました。

経田泰夫（制作進行）

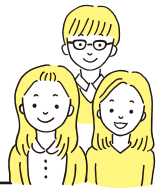
静まり返った夜の美術館を撮影しながら、魅力を再発見しました。何よりも皆さんの豊かな表情と表現力が素晴らしく、印象的でした。さて、次の映像作品はいつ撮りましょうか？ また皆さんと一緒に面白いことに挑戦したいです。

方野公寛（撮影編集）

A Museum For All,
and With All
ふりかえり座談会

CHAPTER 5
TO BE CONTINUED...

「みんなと美術館」のこれから
10年後、50年後の当たり前に向かって



岡田：最初のきっかけを作るのは美術館の役割だけれど、**参加者が自分の考えや意見を出しやすい場作りが大事**なんだと思う。僕がろう学校の生徒たちと初めて会った時みたいに、最初はどう配慮すべきかと考えがち。でも、まずは知ること。お互いのできるできないがわかると、「次はこうしよう！」と工夫点が見つかりやすくなる。共通するビジョンはお互いの円の重なり合う部分。それは徐々に広がるけれど、それぞれの思惑という重なり合わない部分があってもいい。そこから**思いもよらない変化が生まれる**。そんな「みんなと美術館」だといいな。

森：誰かにアプローチするところからしか始まらないので、**いろんな人たちとつながる**ことが大事なのかな。関わってみないとわからないんだから、関わってみて、その人たちに教えてもらうことを増やしていく。美術館スタッフが個々に築いた関係が結びついたり、さらにつないでもらったり。ここからさらに50年、楽しみですね。

吉備：いろいろ話していて、開館した頃に「子どもの多い美術館」だとびっくりされたことを思い出しました。今では当たり前のように受け入れられているけどね。これと同じように、美術館という場所は知っているけど行きたいわけじゃない、行きたいけど行くまでが大変、行っても楽しめるか気になる人が、身近な人に誘われて、あるいは情報をきっかけに、「ちょっと行ってみようかな」と思って、実際に来て、見て、何か感じ取ってくれたらいいな。誰かといっしょでもいいし、ひとりでもいい。**「わたしと美術館」の集合体としての「みんなと美術館」**だから。

2020年2月11日　金沢21世紀美術館 会議室1にて
構成:岩本歩弓

2019年度
文化庁委託事業「障害者による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）」
金沢21世紀美術館 地域文化活性化支援事業「みんなの美術館 みんなと美術館」

「手話を交えたおしゃべり作品鑑賞会」

展覧会「アペルト11 久野彩子 都市のメタモルフォーゼ」とともに

主催：文化庁
金沢21世紀美術館［公益財団法人金沢芸術創造財団］
協力：石川県立ろう学校

［担当］
運営：吉備久美子、森 絵里花（金沢21世紀美術館）
運営補助：岡田優太（金沢21世紀美術館インターンシップ研修生）
当日進行：板谷咲希、森山零菜、山本沙采（石川県立ろう学校文化部）
文化部顧問：長部直子、小原祐子、白井五月（石川県立ろう学校）
手話通訳：山岸夏子、山田郁代、山原浩子（石川県聴覚障害者センター）
展覧会担当：立松由美子（金沢21世紀美術館）

「手話で紹介する金沢21世紀美術館」動画制作と配信

動画URL　https://youtu.be/nuQJcRRQQBI（2020年3月現在）

主催：文化庁
金沢21世紀美術館［公益財団法人金沢芸術創造財団］
協力：社会福祉法人石川県聴覚障害者協会

［担当］
運営：吉備久美子、森 絵里花（金沢21世紀美術館）
参加：社会福祉法人石川県聴覚障害者協会青年部有志10名
嬉野 博、貞弘一騎、清水愛香、背戸里香、土倉仁菜、恒川あやめ、西 朱莉、嶺藤 至、森光佑矢、山田大貴
ワークショップ講師：山田洋平
撮影編集：方野公寛、MP　撮影補助：サイトウキヨミ
制作進行：オフィスブランカ
手話通訳：鴻野真紀子、長井由美子、森川さや香（石川県聴覚障害者センター）

金沢21世紀美術館維持会員

SANAA事務所
米沢電気工事株式会社
ナカダ株式会社
金沢市農業協同組合
株式会社福光屋
ヨシダ宣伝株式会社
金沢信用金庫
株式会社総合園芸
西日本電信電話株式会社 金沢支店
株式会社ヤギコーポレーション
株式会社北國銀行
一般社団法人金沢建設業協会
ニッコー株式会社
医療法人社団健真会 耳鼻咽喉科安田医院
株式会社メープルハウス
株式会社マイブックサービス
公益財団法人金沢勤労者福祉サービスセンター
株式会社浦建築研究所
金沢中央農業協同組合
株式会社グランゼーラ
まつだ小児科耳鼻咽喉科クリニック（能美市）
公益財団法人高岡市勤労者福祉サービスセンター
アルスコンサルタンツ株式会社
しま矯正歯科
協同組合金沢問屋センター
一般社団法人MuU
三谷産業株式会社
スーパーファクトリー
株式会社エイブルコンピュータ
株式会社中島商店
株式会社橋本確文堂
ヨシダ印刷株式会社
株式会社北都組
金沢市一般廃棄物事業協同組合
金沢商工会議所
株式会社竹中工務店 北陸営業所
一般社団法人石川県鉄工機電協会
大村印刷株式会社
石川県勤労者文化協会
前田印刷株式会社
株式会社うつのみや
公益社団法人金沢市医師会
連合石川かなざわ地域協議会
株式会社金沢環境サービス公社
医療法人社団竹田内科クリニック
株式会社日本海コンサルタント
株式会社アイ・オー・データ機器
石川県中小企業団体中央会
能登印刷株式会社
株式会社金沢舞台
北陸名鉄開発株式会社
高桑美術印刷株式会社
株式会社浅田屋
北菱電興株式会社
株式会社四緑園
株式会社橋本清文堂
カナカン株式会社
株式会社かゆう堂
株式会社バルデザイングループ
石川県ビルメンテナンス協同組合
横浜エレベータ株式会社
株式会社ほくつう
株式会社グッドフェローズ
日本海警備保障株式会社
株式会社山越
田中昭文堂印刷株式会社
株式会社金沢商業活性化センター
株式会社加賀麩不室屋
べにや無何有
日本ケンブリッジフィルター株式会社
めいてつ・エムザ
日機装株式会社
横河電機株式会社 金沢事業所
有限会社芙蓉クリーンサービス
株式会社インプレス 美術事業部
株式会社甘納豆かわむら
ArtShop 月映
株式会社アドバンス社
金沢ターミナル開発株式会社
株式会社計画情報研究所
株式会社ビー・エム北陸
一般社団法人石川県繊維協会
株式会社大和
アムズ株式会社
株式会社あまつぼ
ヨシダ道路企業株式会社
株式会社金太
イワタニ北陸株式会社
末広フーズ株式会社
北陸スカイテック株式会社
辻商事株式会社
アキュテック株式会社
森平舞台機構株式会社
アズビル株式会社
北陸電話工事株式会社
株式会社五井建築研究所
金沢セメント商事株式会社
ホクモウ株式会社
医療法人社団映寿会
鮨 みつ川
株式会社山田写真製版所
株式会社ユニークポジション
株式会社ロフト 金沢ロフト
株式会社鍛冶商店
株式会社東急ハンズ 金沢店
坪田聡
林檎舎アップルカンパニー
アイパブリッシング株式会社
株式会社ホクスイ
山田知明

（2020年3月現在）

みんなの美術館　みんなと美術館
金沢21世紀美術館×手話×ろう者　活動のあゆみ

A Museum For All, and With All
A museum meets Japanese Sign Launguage and the deaf

編集：
岩本歩弓
吉備久美子（金沢21世紀美術館）

Edit:
IWAMOTO Ayumi
KIBI Kumiko（21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa）

表紙デザイン：
セキユリヲ（ea）

Cover Design:
SEKI Yurio（ea）

中面デザイン：
砂原久美子（石引パブリック）

Design:
SUNAHARA Kumiko（ISHIBIKI Public）

イラスト：
北口加奈子

Illustration:
KITAGUCHI Kanako

翻訳：
大村由紀子

Translation:
OHMURA Yukiko

印刷：
大村印刷株式会社

Printed by:
Omura Printing Co., Ltd.

発行日：
2020年3月19日

Date of Publication:
19 March, 2020

発行：
金沢21世紀美術館［公益財団法人金沢芸術創造財団］
〒920-8509　石川県金沢市広坂1-2-1

Published by:
21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa
（Kanazawa Art Promotion and Development Foundation）
1-2-1 Hirosaka, Kanazawa, Ishikawa, JAPANA 920-8509

無断で本書の全体または一部の複写・複製を禁じます。
©21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa All rights reserved.
ISBN 978-4-903205-82-3

本書は下記のダウンロードサイトにて
PDF閲覧できます。
https://www.kanazawa21.jp/files/AMuseumForAll,andWithAll_2019.pdf

P.1 レアンドロ・エルリッヒ《スイミング・プール》2004（部分）